

公益社団法人日本語教育学会 文部科学省委託事業

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」2018

はじめに

文部科学省の受託事業としてスタートした「外国人児童生徒等の教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の2年目は、初年度に作成したモデルプログラム案の実施検証をいたしました。外国人材の受入拡大政策を受けて、日本語指導が必要な子どもたちはさらに増加するものと予想され、その教育・支援に向けた対応の充実が急務となっています。外国人の子どもたちを受け入れる体制・制度の整備と、日本語指導や教科指導、異文化理解の促進等、当該児童生徒および彼らと共に学び育つ全ての子どもたちを視野に入れた教育の内容と方法の開発・整備、そして実際に教育を担い得る専門性を有した人材の育成が喫緊の課題となっています。本事業の2年目の総括として2月に開催したシンポジウムでは、本事業の協力者および公募に応じてくださった方々によるモデルプログラムを活用した授業・研修の実践事例17件が報告され、満席の会場ではそれぞれの実践事例に基づき熱気に溢れた検討がなされました。

本事業は、学校教育において多様な言語文化背景の子どもたちの日本語指導や教科指導等を担う教員が備えるべき資質・能力を具体的に示し、その養成・研修プログラムを開発することを主眼とするものです。シンポジウムで報告された人材育成の取組は、日本語指導を担当する学校教員を対象とした教育委員会による養成研修、あるいは大学における日本語教師志望の学生や一般学生を対象とした授業、また国際交流協会等が実施する地域における学習支援員の養成など、多岐にわたっていますが、このこと自体がたいへん重要な意味を持ちます。子どものことばと学びを十全に支えるには、教育をする側が子どもを見取る多様な視点を確保することが必要です。また、学校の中で教員による指導だけで対応することが困難である状況を変えていくためには、教育・支援にあたる人員を増やすこと、そして環境全体を見渡してその体制・制度を整備し、関係する組織や人の連携体制を作ることが不可欠です。

多様な立場にある組織や人が子どもたちの教育・支援に関わることはたいへん大きな力となります。学校と家庭、学校内でも在籍学級での授業場面と個別支援の場面とでは違う

顔を見せまし、得意なことと苦手なこと、活動内容に対する興味関心の度合いなどによっても、取り組む姿勢や表情、発話などに違いが見えます。集住地域と散在地域、大都市圏と地方の市町、言語文化背景のバラエティなど、課題解決には常に多角的に捉える視点をもって考えることが求められます。異なる環境や立場にある方々がそれぞれの立ち位置から得た情報を共有し、多様な視点を得て課題に取り組んでいらっしゃる協力者のみなさま、また関心をもってくださる皆様のご意見等に、目が開かれる思いです。

ことばと学びを支えることは、即ち人を育てることです。既に大勢の多様な言語文化を背景とする子どもたちが生活し、国として外国人の受入をさらに拡大していくことを選択したこの社会で、教育の体制整備は喫緊の課題です。日本で学校教育を受けて成長していく子どもたちの多くは、その後も日本社会に根付いて生きていきます。子どもたちが豊かな力をつけ、十分に学び、希望を持って育っていけるようにすることはこの社会の責務であり、そのように育った子どもたちの力は社会の貴重な活力となります。国として外国人の受入を拡大していこうという選択をした今、多様な言語文化の子どもたちが十全に育ちうる体制・制度の整備、そして何より教育にあたる人材の育成はますます重要な課題です。学校教育を中核とし、教師や支援者等子どもたちを支える立場にある方々の育成は、そうした子どもたちにとって何より重要なことであり、また日本社会にとっても極めて重要な課題であると思います。

この2年間の事業の力強い展開にご尽力くださった皆様に改めて御礼申し上げます。最終年度となります来年度に大きな実りが得られますよう、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益社団法人日本語教育学会

会長 石井恵理子